

子育ての探究 その一

— 親は子どもに愛情を感じていなかったのか —

柴崎 正行

子育てに自信が持てないという親が増え、幼児虐待も増加しているという。また塾や早期教育がますます盛んになっている。女性や子どもの権利が認められているにもかかわらず、なぜこうした家庭における子育てをめぐる混乱した現象が起こっているのだろうか。その一方で、少年犯罪や荒れる学校などの社会問題が

連日新聞を賑わしている。こうした子どもと育児に係した社会問題を、マスコミや有識者は核家族化や少子化による家庭や地域の教育力の低下のせいだといけれど、本当にそうなのだろうか。現在のわが国の子育てを揺るがしている背景には、もっと大きな問題が横たわっているのではないだろうか。

そもそも歴史的にみて、育児とは誰がどのように担ってきたのであろうか。もつとつきつめてみれば、子どもはいつの時代も本当に親や家族そして地域の人々に愛され大切にされてきたのであろうか。また子どもたち自身はいつの時代も充実した子ども期を過ごしてきたのであろうか。こうした子どもと育児に関する問題についての疑問には、どのような分野のどのような研究がどのように答えてくれるのだろうか。

保育学の分野に身を置き、その確立を願って探究して約十年になるが、私自身は残念ながらまだこうした問題に答えられない。私自身がまだ保育学というものの全体像を理解していないこともあるだろう。もしかしたら家庭教育学や教育社会学、家族社会学や文化人類学、さらには民族学や社会史などの分野で、こうした育児の問題をどこまで説明してきたのかを知らないということもあるのかも知れない。

そこでこうした近接領域の研究成果も含めて、今直

面している子どもと育児の問題についての素朴な疑問を、私なりに探究してみたいと思う。これが本連載を書きたくなつた理由である。もつと端的に言えば、わが国において子育ては、どのように行われてきてどこに向かおうとしているのかを、現在の学問的な目から見てみたいというのが私の中心的な課題である。

子どもは可愛くなかつたのか？

私自身は子どもと遊ぶことが大好きである。幼稚園や保育所で幼児たちが楽しそうに遊んでいる姿を見かけたときなど、思わずほほ笑んでしまうこともある。こうした自分自身の子どもに対する愛着的な感情は、人間としての本性であるはずと信じて疑わなかつた。しかしフィリップ・アリエスの著『子ども』の『誕生』に出会ったときに、正確にいえばアリエスの学説に出会ったときに、その信念は揺らぎ始めたのである。

アリエスはフランスの人口学を基盤にして、子どもの死をめぐる親の態度の歴史的变化を墓碑や肖像画などを手掛かりにして分析した。その結果、十六、十七世紀を境にしてフランスでは親の子どもに対する態度が大きく変化したということを明らかにした。

十六世紀頃までは、子どもは日常生活において大人と混在しており、仕事や遊びなどの集まりに子どもたちも参加していたという。死んでも墓碑に名前が記録されることはなく、その肖像画が描かれることもなかった。まだ生き残ることがおほつかない時代であったので、親は子どもをたくさん産み、そして子どもは多数死んでいった。さらに子どもは危険な乳児期を生き残ると、じきに徒弟奉公に出されたために家庭を離れて過ごすことが多かった。こうして多産と死亡率の高さ、家庭を離れて学ぶことなどにより、当時の親たちは子どもに愛着を感じるものが少なかったというのである。

しかし十六世紀を過ぎると、子どもを死なせないような育て方をする方が経済的にも有効であるという認識が広がり、子どもを少なく産んで死なせないように大事に育てるようになった。そのため親は子どもを大切にするようになり、死んだ子どもの肖像画が出現した。十七世紀になると子どもの肖像画は一般的になり、そこに描かれた服装も子どもらしい服装になっていき、少なくとも上流階級の子どもは大人と異なる服装をしていたという。また子どもたちの教育のために学校が設立され、子どもは仕事をしている大人から分離されて社会から隔絶された教育施設の中で学ぶようになった。親たちは子どもの勉学に関心を抱くようになり、とくに上流階級では現在のように



勉強を中心とした親子の愛着関係が成立していったという。

このアリエスの解釈によれば、現在のわが国にみられるような親子関係はフランスにおいては十七世紀以降に成立してきたものということになる。また子どもを愛着の対象としてみる育て方も、その頃から成立してきたとも考えられる。しかしそれ以前の親が多くの子が死んだからといって、わが子に対して可愛いとか悲しいという感情を持たなかったという解釈には、どうしても納得がいかなかったし、今でもまだ疑問が残っている。動物でさえもわが子の死を悲しむというのに……。

母親の愛情は本能ではないのか

私の疑問は、E・バダンテールの著書『母性という神話』と出会うことによって、さらに大きく揺らぐことになった。バダンテールはアナール派の新しい歴史

学の流れに属し、十七世紀から二十世紀にかけてのフランスにおける母親の心性史を描いた。そしてその結論は、母性愛は歴史的にみると近代に形成された概念であり女性の本能ではないという、私にとってはまさに衝撃的なものであった。

バダンテールによれば、乳母を雇うという習慣は、フランスでは非常に古くすでに十三世紀には乳母の紹介所がパリに初めて開かれたという。だが乳母に預けるといふ習慣はもっぱら貴族階級に限られていた。しかしこの習慣は十八世紀には職人の家庭では妻も生きるために働かなくてはならなくなって一般化し、そのために乳母が不足した。そこで貧しい者から裕福な者まで、大都市であろうと小さな町であろうと、子どもは田舎に里子に出され、そこで育てられるようになったという。

一七八〇年にパリで生まれた二万一千人の赤ん坊のうち家庭で乳母によって育てられた子は一〇パーセン

ト程度であり、残りのほとんどは里子に出されたという。平均四年間を田舎で里子として過ごし、そして里子にだされた子の多くが怪我をしたり病気になったが、その当時にはまだ小児科医はいなかったので、多くの幼児が死んだという。

こうした乳母や里親に任せるという育児に対する無関心さと死亡率の高さが、子どもに対する無感覚を生みだし、十八世紀の家族に関する様々な出来事の記録には、子どもが死んだということはほとんど論評されていないという。また五歳以下の子どもの葬式には親が参列しないことがよくあったという。

十八世紀までの、子どもに対する母親のこうした無関心さはルソーらによって批判されるようになった。そして十九世紀を通じて、自分の乳を与え心理的な絆によって結ばれていく新たな母親像と育児方法が形成されていったという。

母親に母性が求められるようになったのは歴史的な

産物であるという、バダンテールの論は明快でありわかりやすい。しかしそうした歴史的要因があったとしても、母親が我が子との心の絆を大事にする育児方法はもともと存在しなかったのだという育児観は、私にとつては納得いかないものでもあった。母親が社会的にどのような役割を求められたかということ、母親のわが子に対する愛情とは別の問題であるとはいえないだろうか。

子どもはいつも

大事にされていた

アリエスに始まり、そしてバダンテールらによって主張されている「十七世紀まで、家庭において子どもは無視されていた存在であり、親子関係も愛情に欠けていた」とする育児観に対



して、大きな疑問を抱き反論しているのがL・A・ポロクである。

ポロクは十六世紀から二十世紀までの英米両国で書かれた日記及び自叙伝から四三三編を選び、これらを詳細に分析した。その結果どの時代においても日記の中では、親はわが子の誕生に歓喜しており、わが子が病気になるれば心配し看病したし、子どもたちの成長を期待していたことを明らかにしている。

この指摘は、これまでのアリエス以来の子ども観を覆すものであり、子どもを思う親の心には変わりがないと主張するものである。またこうした誤解が生じた原因として、絵画や道徳書、育児書というような二次資料を分析したためとし、生きた親と子どもの証言としての日記や伝記を一次資料として用いることの必要性を主張している。

このポロクの著書を見つけたときに、私は我が意を得たりという思いで読み進めていった。しかし読みな

がらまた疑問も生じてきた。ポロクが分析の対象にしている日記や自叙伝を当時書けた社会階層はおそらく貴族などの上流階層であろう。またわざわざ日誌や自叙伝を書くような人々は、おそらく自分の行動に対しても自覚的でしかも細やかな記述のできる人であろう。そうした意味で、この一次資料そのものが限られた人々を対象にしているのかも知れない。しかし階層はともあれ、どの時代にも子どもに愛情を抱いていた親が存在していたことが主張されたことは、私にとつては救われる思いであった。

親の子どもに対する愛情を

どう分析すればよいのだろうか

アリエス、バダンテール、そしてポロクと紹介してきたが、わが国の子育ての問題を明らかにしようとする場合に、まだ検討されるべき問題がいくつか横たわっていることに気づく。

第一に、同様な手法によってわが国における育児の心性史を描き出そうとする場合に、どのような資料を用いるかという問題である。アリエス流に絵画やお墓、服装を分析するのか、バダンテール流に各種の報告書や規則、戸籍書や日誌などを分析するのか、さらにはポロク流に日記や自叙伝、新聞記事などを分析するのか。その分析対象によって検討できる範囲と内容が異なつてこよう。こうした資料の違いをどう関連づけて同時代を多角的に描き出すが問われてこよう。

第二に、アリエスとバダンテールはフランスの子育てについて分析したのに対して、ポロクは英米の子育てについて分析しているのであつて、同じ西欧を対象にしても宗教や文化が必ずしも同じではないという問題である。この点についてはポロクも慎重に検討してはいるが、やはり民族や宗教、文化が違えば、子育て観も異なつてくることが予想される。また同じ文化であっても社会階層が異なれば子育ての実態も違つ

てこよう。したがつて西欧流の子育て観の変遷が、わが国の子育てにおいても生じていると決めつけることは避けたい。わが国の子育ての変遷は、わが国の資料を基にして分析し検討されなければならないであろう。また社会階層の違いが子育てにどのような影響を及ぼしているかも検討されなければならないだろう。わが国において、親が子をどのように思い、どのように子育てをしてきたのか、まだまだ私の疑問と探究は当分続きそうである。

(東京家政大学)

文献

- (1) フィリップ・アリエス著(杉山光信・杉山恵美子訳)『子ども』の誕生』みすず書房 一九八〇年
- (2) E・バダンテール著(鈴木 晶訳)『母性という神話』ちくま学芸文庫 一九九八年
- (3) L・A・ポロク著(中地克子訳)『忘れられた子どもたち』

勁草書房 一九八八年